



# YNAC通信

2021.07.01 No.38

## ガイドを志す君たちへ

市川 聡

今年の4月に私もとうとう還暦を迎えました。そろそろ個人的にもYNACにも終活の時が近づいてきました。ということで、私がこれまで取り組んできたガイドという仕事について、ぼちぼち、まとめにかけたいと思います。

よくエコツアーガイドといわれますが、エコツアーとはエコロジーに配慮した持続可能な観光を指す言葉であり、その解説の中身を問うものではありません。つまり面白からうがなからうが、自然に配慮していればエコツアーガイドと名乗ることはできます。しかしこれは私たちが目指すガイドの姿ではありません。そこで我々の目指すガイドを「インタープリティブ・エンターテインメント (IE ツアー)」と称したわけですが、長ったらしい横文字で、ちっとも普及には至っておりません。訳すと「解釈の娯楽」といっていますが、自然を理解することを楽しむという意味では、我々の目指すものを端的に表しているとは思っています。

小説家で詩人でもある多和田葉子さんが、作家の役割を以下のように話しています。「科学はファクトしか語りません。ファクトを紡ぎ合わせて、フィクションを作るのが文学の役割です。」これはまさに私が目指すガイドという仕事にもぴったりとあてはまります。事実だけをつなぎ合わせて解説しているのであれば、それは専門の研究

者にはかきません。しかし、大学の講義がそうであるように、ただそこにあるものを科学的に解説するだけでは、たいして面白くはありません。それを紡ぎ合わせてストーリーとして展開することが、ガイドのなすべき役割なのです。

かつて某ミーティングに参加した時に、「究極の自然観察会」というワークショップがありました。如何なるものかと覗いてみると、「どんな質問にも答えます！」という内容でした。しかし屋久島のガイドが、初めて来島した人から受ける質問に答えることはたやすいことです。そんな方たちが興味を持つ物語を語って、自然に関する疑問を引き出し、その謎が解けることの快感を味わっていただくこそが、本来の究極のツアーではないでしょうか。

そういう意味では、一つ一つのツアーは落語の一演目のようなものです。私の白谷雲水峡ツアーと君たちのものとは違う作品です。落語が江戸時代から語り継がれて今があるように、一つ一つの作品は、語り継がれなければ、消えてしまう運命にあります。落語の世界ではどの師匠からでも、分け隔てなく話を教わるができるようです。門外不出ではないからこそ長く伝わったともいえます。落語は基本のストーリーに、各噺家が時代に合わせてアレンジして発展しています。私の噺を継承し発展させてくれる人たちをお待ちします。



屋久島の鳥たち～1年間の記録を通して

福留 千穂

とりさんぼの記録

去年は「とりさんぼ」について紹介したが、具体的にどんな鳥がどのくらいの期間見られるのか記録しておこうと思い、手軽に書き込めるスマホアプリの日記機能に記していくことにした。ぼちぼち続けていくうちに、渡り鳥がいつ来たのかをパッと見てわかるように、一覧になっている手帳のカレンダー欄に書いていくことに決め、新年の手帳が出る10月からスマホと手帳と両方に記録していった。

時々サボることもありながらも、特に苦と感じず現在まで続いている。記録をしていて良いことは、いつの間にかいなくなった渡り鳥が、いつまでいたかが大体わかることだ。去年の7月中旬から約1年間の屋久島で見られる鳥がわかってきた。



鳥の移動

毎年渡ってくる鳥たちを見ていると、どういつタイミングで移動を始めるのだろうと気になり始めた。

例えば、同じスズメ目ヒタキ科のキビタキとジョウビタキ、ルリビタキの入れ替わり。夏鳥であるキビタキは、去年は10月下旬まで確認され、今年は4月中旬に初めて確認できた。7か月も屋久島で過ごす夏鳥だ。そして、冬鳥であるジョウビタキは、入れ違いのように10月下旬から4月中旬まで確認している。同じく冬鳥のルリビタキはジョウビタキより1か月遅れでやって来て一足先に北へ向かっている。入れ違いのようにキビタキとジョウビタキは登場して去って行くが、同時期にいるジョウビタキとルリビタキは実は生息している環境が重ならない。ルリビタキは森の中で、ジョウビタキは割と拓けた耕作地や市街地の近くの樹木で見られる。そのことから、同じ時期に重なってもうまく棲み分けができているように感じる。生息環境が異なるキビタキとジョウビタキの移動のタイミングは、どちらかが生息環境を脅かすということではなく、やはり気温の変化でそろそろ移動しなければ生活しにくいということが決まるのだろう。

一方、シロハラとアカハラの移動は、またちょっと違うような気がする。シロハラは毎年来る冬鳥で去年の11月上旬から今年の5月上旬まで確認できた。アカハラは見た目がシロハラとそっくりだが



キビタキ 2020.5.2 撮影



ジョウビタキ 2021.2.10 撮影



ルリビタキ 2020.11.25 撮影

屋久島野鳥観察時期一覧 2020.7～2021.5

	7		8		9		10		11		12		1		2		3		4		5		
	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
キビタキ (リュウキュウキビタキ)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●										●	●	●	●
ジョウビタキ									●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
ルリビタキ										●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			



シロハラ 2020.4.23 撮影



アカハラ 2020.4.28 撮影



ツグミ 2020.12.17 撮影

	7		8		9		10		11		12		1		2		3		4		5		
	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
シロハラ									●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
アカハラ										●	●										●	●	
ツグミ											●		●	●					●	●			

お腹がオレンジ色で、渡りの途中で立ち寄る旅鳥だ。去年は、シロハラに遅れて11月下旬から12月上旬の間に見られ、さらに南下し、また今年の4月中旬から下旬に渡ってきた。シロハラは跳ね歩きながら落ち葉を払いのけ、ミズや昆虫の幼虫を食べる。アカハラも同じような行動をするので、同じ場所にシロハラとアカハラと一緒に居たりする。となると、遅れてくるアカハラにとっては、住みたい場所はすでにシロハラに利用されていて、入る隙が無いのかもしれない。そのため居場所を求めてさらに南下するのではないだろうか。シロハラはさらに北の方から渡ってくるツグミとは時々けんかしている姿も見られるそうだ。春先になるとアカハラがまた北上してくるが、そのタイミングでシロハラも北上していくようだ。

はないだろうか。

渡り鳥だけでなく、留鳥でも島内の移動があると考えられる。

本土では夏鳥のコマドリやトラツグミは屋久島では留鳥である。ただ、夏場は標高600m以上に移動しているようだ。コマドリは11月中旬から3月上旬までは里地(標高約10~100m)で、3月下旬からは白谷雲水峡やヤクスギランドなどで確認できている。2月下旬から3月上旬にかけてさえずり始め、夏場は標高600m以上でのみ確認できる。同じようにトラツグミも11月中旬から1月中旬は里地で確認でき、夏場は太忠岳や黒味岳の登山ルートなど標高1000m以上で夜中から明け方にかけて鳴き声を聞くことがある。

また、ミサゴも秋から春先までは里地の上空を飛んでいる姿をよく見るが夏場は見ない。7月下旬に目撃したのは、西部照葉樹林ツアーの時、



キセキレイ 2021.3.20 撮影

ほんの一瞬姿が見られなくなるのがキセキレイだ。去年は8月中旬から姿を見せ今年5月上旬まではよく目にしていたが夏場は見ない。コマドリやトラツグミのように山の方に行っているのではないかという意見も聞くが、去年6月上旬に宮之浦岳まで野鳥繁殖状況調査に行ったときは確認できなかった。キセキレイは北上して繁殖しているので

	7		8		9		10		11		12		1		2		3		4		5		
	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
キセキレイ			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		







## 『鯉節』

鯉の頭と内臓を取り三枚におろした身を更に背と腹に分けたものを「節」と言う。

この節にした鯉を煮熟し焙乾したものが『生節・なまり節』と呼ばれ、水分含有率が40%前後である。

焙乾（燻乾）とは薪や藁を燃やし煙をあてながら魚の生臭さと水分を取り除き、更に煙に含まれるフェノール類で表面をコーティングすることで、脂の酸化を防ぐことである。

焙乾の後に放冷し休ませることで内部の水分が表面に出てくるので、火入れと放冷を何度か繰り返して水分含有率17~20%までにする。それに一回だけカビ付けをしたものが『荒節・鯉節』であり、これを削ったものがいわゆる『花ガツオ』である。

そこから『本枯れ節』になるには『荒節』の表面を削って『裸節』にしたところに、カビ付けを数回繰り返して更に水分含有率を13~15%まで抜いて保存性を高める。これが完成するには数か月から一年程かかる。

## 『土佐の鯉節』の歴史

豊臣秀吉の紀州征伐（1585年）により平定（？）された印南地方の豪族と配下の漁師たちは、大渡海船団を組み、はじめは潮岬近辺で漁を行うが、地元「潮御岬会合」から締め出されたため南下し、五島列島や日向方面での鯉漁を開始した。1600年代半ば、そのルート上の土佐清水浦に紀州印南の漁師角屋甚太郎が『熊野節』の製法を伝えた。そして2代目甚太郎は焙乾する際の燃料を藁から薪に替え、悩まされていたカビ臭さを除去するために優良カビをつけるこ

とで改良をすすめた。その技術を受け継いだ土佐宇佐浦の亀蔵らが、かび付け法を含む『土佐節』の改良に成功したのは1600年代末のことである。これにより『土佐節』は『熊野節』を抜いて全国一の製品と言われるまでになった。

『改良土佐節』の製法は土佐藩の秘伝とされ、甚太郎の故郷である紀州に伝えられた程度で、長く他国へは公開されなかった。しかし、宝永四年（1707年）に起きた宝永大地震による津波で印南や土佐の鯉節産地が大打撃をこうむった時、薩摩藩喜入氏（枕崎）は土佐節の改良に関わった紀州印南漁民の森弥兵衛を招くことに成功しその秘法を入手した。これによって『熊野節』をしのぎ、『改良土佐節』に次ぐ優良品『鹿児島節（かごぶし）』が天下に知られるようになった。

## 『鹿児島節』

喜入氏が『改良土佐節』製造技術を手に入れる以前の1600年代初頭には、シャム（現在のタイ）行きの英国船が九州の他地域で作られた鯉（荒）節を積んで近隣の泊浦（坊津の副港）に入港していた。泊浦や坊津は薩摩藩の唐物抜荷（対明密貿易）船が入る港になっていて、対明貿易だけでなく琉球や東南アジアとの交易も行われていた。しかし1722年に「唐物崩れ」と呼ばれる密貿易に対する手入れ（取り締まり）があった際、多くの船が枕崎港に逃れてきた。それを領主喜入氏は手厚く保護し、大船の所有者には鯉漁と『鹿児島節』製造の特権を与えた。密貿易船をカツオ船に利用することは近海の鯉漁場に恵まれていなかった喜入氏にとってまさに渡りに船（？）であり、これが後に漁場を琉球の黒島方面まで

伸ばし大量漁獲・大量製造を行う端緒を開いた。

## 『役（屋久）島節』

「かつおぶし」が文字として文献に登場する最古の資料は『種子島家譜』であり、永正十年（1513年）に臥蛇島（屋久島の南西およそ120km）から領主の種子島家への献納物にしたと記してある。北上する黒潮が島々の近くを流れる臥蛇島・屋久島を含む南西諸島では、釣った鯉の保存法として、煮熟の後囲炉裏の上にしたつらえられた簀子（すのこ）で焙乾し、天日干しするという伝統的方法が、前述した『土佐節』の展開よりも100年以上前からあったという証左である。

その後、カビ付けを繰り返す旨味と保存性が増した『役（屋久）島節』が「諸国鯉節番付表」で『鹿児島節（枕崎）』を押さえて上位に入っているのは、何よりも近場に漁場があり鯉を新鮮なうちに水揚げし、ふんだんに湧き出る水で処理することができ、燃料の薪には事欠かないという好条件が揃っていた。鯉節は新鮮なうちに下処理と一次加工をすることでその品質が決まるのである。

鯉は赤道付近の水温の高いところにおいて黒潮の北上と共に日本近海にやってくる。それをいち早く釣るために、明治期には枕崎・坊津・山川から大型の発動機船が屋久島以南の漁場で漁を行うようになり、特に口永良部島には枕崎の船主が小屋をつくり大釜を据えて鯉節製造作業（島イ

デ）を行った。同じ頃永田においては地元の鯉節製造業者が十数軒、生魚の仲買人も現われ、焙乾に使う薪を売る人もいて大層賑わった。一方島外船による水揚げの恩恵にあずかることのなかった宮之浦・志戸子・一湊集落では、明治半ば過ぎ「屋久曾根」に鯖釣りに来た天草の漁師から鯖釣りの技術と鯖節製造法が伝えられたことで、ほとんどの船が鯖漁に転換した。また宮之浦から東側の集落では鯉漁をやめて農林業に移った人が多かった。やがて島外船による大漁漁獲・大量生産システムが粗製乱造を引き起こしたこと、足の速い蒸気船が導入されたため口永良部島での島イデは数年で廃止され、永田においても水揚げ量が減り一気に衰退した。

現在では屋久島において鯉節の生産は皆無であるが、明治・大正の時代、鯉漁から鯖漁、鯉節製造から鯖節製造に移行した地元業者の製造方法には、かつての優良鯉節製造技術が脈々と受け継がれている。

コロナ禍の下で、台所と書籍の間を行ったり来たりしながら、黒潮と麴菌に羽裏（はぐく）もるわたしたちの生活の幸いを考える日々である。

## 参考文献

鯉節（宮下章）、屋久島の民俗文化（下野敏見）、上屋久町郷土誌、種子島物語（鮫島譲）、鯉節と浦人たちの歴史（藏園治己）、鯖のはなし（林宏）



## アサギマダラ

小原比呂志



2021.4.8.屋久島平野でハンダマから吸蜜するアサギマダラ

### ハンダマ畑を作る

屋久島でよく食べられている植物に「ハンダマ」があります。標準和名をスイゼンジナ、別名をキンジソウといい、熊本が有名ですが、京都や金沢でもやや高級な地域野菜としてそれなりの値段で販売されています。

このハンダマは野菜になるだけでなく、アサギマダラというチョウを誘引する花をつけることが知られていました。以前から屋久島でもアサギマダラが群れ飛ぶ場所ができなかな？と考えており、昨年の春、たまたまひとかかえの苗を入手したので、持ち帰って庭に植えてみました。順調に挿し芽を繰り返して4坪ほどに畑を広げ、1年経った2021年3月、春の陽気にこのハンダマが開花しはじめました。そして気温が20℃を越えだした3月19日、期待通りアサギマダラが庭に群れ始めたのです。

### アサギマダラが来た！

庭に来たチョウたちはどの個体も翅が新鮮で、暮れから初春にかけて屋久島で生まれ育ち、羽化したばかりの若い蝶のようでした。4月に入るとにぎやかに群れ飛ぶようになり、とりわけ4月8日と19日は数十頭の見事な群舞になりました。気象データと照らし合わせると、どうも月の旬

ごとの平均日最高気温が20℃を超えた3月中旬以降に突然個体数が増えてきたようです。

5月に入って花が終わり、気温が25℃を越えるようになるとアサギマダラも姿を消しました。このころ九州や本州からの報告が来はじめ、どうやら北上していったようでした。

### アサギマダラの渡り

アサギマダラは長距離の渡りをするチョウですが、そのことが確認されたのは、1980年代に全国組織的な「マーキング調査」が成果を上げ始めてからでした。春先に琉球列島に現れた大群は、春から夏にかけて日本列島を北上し、本州中部以北へ移動して涼しい山地のヒヨドリソウなどの蜜を吸い、イケマなどの食草に産卵して繁殖します。まれに北海道北部やサハリンまで移動した例もあるようです。そして秋が近づくと、新しく羽化した個体群が南下をはじめ、琉球列島、台湾、そして中国南部の亜熱帯環境へと移動します。こちらではハンダマなどの蜜を吸い、サクラランなどの常緑性植物を食草として繁殖します。

なお、イケマもサクラランも体に毒（アルカロイド）を含み、アサギマダラは幼虫時代からこれを体内に蓄えることで、食べられにくくなっていると考えられています。

### マーキングで移動を調べる

アサギマダラの翅の浅葱色部分には鱗粉がなく、チョウにダメージを与えずにサインペンで字を書くことができます。



2008.10.21. 屋久島西部で再捕獲された個体

そこでアサギマダラの好む花が咲く場所に陣取って、集まったチョウを片っ端から網で捕え、翅に日付・地名・記録者の略号を書き込んで放ち、その再捕獲を期待するというマーキングによる調査方法が編み出されました。移動の経路はすべてその再捕獲の結果から解明されたものです。

2000年代に入ってこのマーキング法のデータがインターネットで共有されるようになり、アサギマダラの大移動は次第にその全容を見せ始めました。

私も一例だけアサギマダラを再捕獲したことがあります。2008年10月21日、屋久島西部にいたアサギマダラには、[デコ 8/18 SRS 7790]と記入されていました。アサギネットで確認すると、驚いたことにこのチョウは屋久島から1200kmも離れた福島県北塩原村、裏磐梯のグラン・デコ・スキー場で、アサギマダラ調査の専門家、栗田昌裕さんが放ったものだということがわかりました。

グランデコ発の、秋の再捕獲の報告は、群馬⇒長野⇒愛知⇒三重⇒和歌山⇒高知という順に移動してゆきます。秋の南下ルートはおおむねこの日本南岸ルートが多いようです。この年は屋久島を越え、1400kmも離れた喜界島でもこのシリーズのチョウが確認されました。その後、与那国島、台湾、そして浙江省や香港まで到達した個体が確認されていたのです。なお屋久島では久保田義則さんがこのアサギマダラの調査に取り組んでいらっしゃいます。

2003年1月、風カルチャークラブの講師として訪れたタイのドイインタノン山のメイバン滝トレールで撮影したチョウは、どう見てもアサギマダラでした。近年台湾や香港との連携がはじまり、アサギマダラの分布と渡りの動向の全貌は、少しずつ解明されつつあります。アサギマダラは東アジアの列島だけでなく、雲南やヒマラヤなど大陸の亜熱帯山地を拠点として広範囲を移動しているのかもしれない。

### 花に惹かれるわけ

ところで、面白いことにハンダマに集まっていたアサギマダラは、ほぼすべてが後翅に性徴の黒紋があるオスでした。

彼らは同じキク科のヒヨドリバナ類やセンダングサ類、西日本では海岸に生育するスナビキソウなどの花に集まります。なぜオスはこれらに惹かれるのでしょうか？

アサギマダラはそれらの花の蜜などに含まれるピロリジジンアルカロイド（PA）という物質に誘引されことまではわかっていたのですが、最近オスがこのPAを使って体内でメスを誘惑するフェロモンを作り出していること、さらにオス自身の性的行動を奮い立たせる物質まで作っていることが突き止められました。つまりオスはメスのための媚薬と、自分自身のための強精剤をハンダマなどのPAから作り出しており、その蜜源となる花へ殺到し、たっぴりと蜜を吸い貯め、活力に満ちあふれてヤル気満々で飛んでいたのです。

一方メスたちはというと、訪れる花にはそれほど選択性はないようです。どうやらメスはPAそのものにはとくに魅力を感じず、オスがそこから再合成して特殊な器官から放つ「男の香り」に強く惹かれるらしいのです。

アサギマダラは気温19～25℃の範囲でしか飛ばないことがわかっています。これまでは気温の上昇とともに涼しさを求めて北方または高所へと避暑をしているのではないかと考えられていたのですが、もしかするとそのタイミングで咲く花の香りに誘われて移動するのかもしれない。季節ごと場所ごとに種によって変化する花の咲きぶりがチョウの大移動行動を規定しているとなれば、興味深いですね。

まだまだ謎だらけのアサギマダラの生態ですが、特に北上の情報は少ないようです。来年は私の畑でも北上群を対象に、初夏のマーキングを試みようかと考えています。



2004.1.1.タイ、ドイインタノン国立公園。カッコウアザミの仲間から吸蜜するアサギマダラ



## 私的ダイビング史

松本 毅

今年度の屋久島ダイビング事業者組合の総会で「名誉会員」(オブザーバー)なるものが設けられた。そして、私は第1号の名誉会員の称号をいただいた。

思えば、18歳でダイビングを始めて45年になる。なんと半世紀近くダイビングをしていたことになる。

そこで私のダイビング史をまとめてみたくなった。

そもそも私は海が大好きだったという訳ではない。小学生のころ、ジャック・クストーの「クストーの海底世界」を見ていたぐらいだった。成り行きで東京水産大学(今の東京海洋大学)に入学してしまい、せっかくだから海に関わる部に入ろうと潜水部に入部した。今思えば、海洋生物研究会の方が性に合っていたのだがその存在を知らなかった。潜水部は、体育会系の部でプール練習では、ハイパーベンチレーション(排気を深く行うことで苦しくなくなる)をして、ブラックアウト(酸欠により気を失うこと)ぎりぎりまで水平潜水50mを数本。海洋実習では、当時はBC(浮力調整器)がなく、ハーネスで潜っていたので、水深が深くなるとスーツの浮力がなくなり、自分の脚力で浮上をしなければならぬ。そこで、海から上がる前に「首飾り」というトレーニングをする。パティのウエイト5kgを首にかけてマスクを外し、10分間の立ち泳ぎをするが、当然何もしなければ沈んでしまうので、必死で立ち泳ぎをして脚力を鍛え上げた。そのおかげで、潜水技術はかなりのものだった。しかし、今では「ハイパーベンチレーション」や「首飾り」は危険なトレーニングとして禁止されている。

潜水部は、1年の秋の伊豆大島の実習を最後に諸事情で退部した。しばらくブランクがあり、結婚をしてから、かみさんがスノーケリングをしたいというので機材を購入して、油壺にスノーケリングに行くようになった。京急平和島に住んでいたため京浜急行で1本、行きはブルーボックスを読み漁り、帰りはよだれを垂らしながら爆睡して帰るということを月一のイベントだった。そのうち、スキューバをやるうと、うちの近くにあった小汚い(失礼!)「藤岡潜水」というお店で機材を購入し、講習を受けることになった。数年後、藤岡潜水は、蒲田の「アクエリアス」というおしゃれなダイビングショップに発展した。私たちもアクエリアスで月一ペースでダイビングを楽しんだ。主に真鶴、熱海、伊豆海洋公園で潜り、鹿島や海外ツアーでハワイ島のコナ、メキシコのラパスなどにも連れて行ってもらった。オーナーの藤岡さんには大変世話になり、私たちに屋久島を紹介してくれたのも藤岡さんだった。



この頃、1984年ニコンスV(ニコンの水陸両用カメラ)が発売され、早速20mmレンズ、接写レンズ、SB102という巨大な水中ストロボも手に入れて水中写真を撮るようになった。当時はリバーサルフィルムで「エクタクローム」がブルーの発色が良いとか、「ベルビア」が失敗がないとか、1ダイブで36枚しか撮れないので、シャッターチャンスやら構図やらを研究して、現像が上がってくるのが待ち遠しかった。冷蔵庫にはいつもリバーサルフィルムが入っていた。しかし、いくら水中フォトコンテストに応募しても佳作にすら入ることがなく、才能がないことに気づいた。

1987年2月に東京脱出計画のため、藤岡さんと一緒に家族で屋久島に視察に訪れた。その時は、永田の民宿「美松」(今のマリブル)でダイビングガイドをしていた森田海王(後に失踪する)にガイドしてもらった。ガイドといっても自らはスピアフィッシングに夢中で私は放置された。口永良部や永田、中間など3日間ダイビングをしたが、不思議と海の印象はなく、2月にも関わらず暖かく穏やかで、山や海の景色が美しく、「ここに住みたい、屋久島が呼んでいる」と移住を決めた。その年(1987年)の10月に屋久島の住民となった。

移住をしてから一人でポイント探しで潜っていたが、いまち良いポイントが見つからずいた。屋久島産業文化研究所の日吉さんの知り合いで宮之浦の竹之内さんが声をかけてくださり、12月30日の夜中に宮之浦港の港内を潜り、そのまま竹之内さんのお宅にお邪魔をして、寝ていた奥様をたたき起こして取ってきたばかりのゾウリエビの味噌汁をご馳走していただいた。これが屋久島の人のダイビングスタイルだと知った。

年が明けてからは、散髪屋・サンセット中島の森一さんを紹介していただき、2人で毎日休みなく3本から4本島中を潜り歩いた。その中で勝丸の山野さん、一湊診療所の竹下先生、竹善の田代さん、三角塗装の三角さんなど地元のダイバーと知り合いになる。

夏前になって森一さんが話をつけたからと屋久島高校前の空き店舗(今の椿商店)でショップをやれと言われて1988年7月1日「ワンダーランドダイバース」という屋久島初のダイビングショップを開業した。この頃利用していた船は、勝丸、縄文丸(葵丸の前

身)、楠川の牧さん、民宿亀、アロハママなどである。ポートチャージは1日3万円~5万円と人数がまとまらないとなかなか出せなかった。お客さんからの問い合わせで料金(ビーチ12000円ポート20000円)を言うと「なんでそんなに高いんだ、沖縄なんかポートで7000円だぞ」と怒られた。しかし、まだまだマイナーな屋久島では単価を下げることはできないので、ガイドの内容とおもてなしで満足していただけるよう頑張った。

1993年に屋久島野外活動総合センターを立ち上げてからは、海・山・川のガイドを始めたが、これまでのダイビングガイドとはずいぶん内容が変わってきた。ただ「わあーすごい」を見せるのではなく、じっくり生物や生態系を意識したガイドに変わった。水深3mで1時間半のダイビングなど普通にやっていた。ダイビングスタッフとして入社してきた宏美(現在独立してダイビングショップ「まる」として活躍している)とは「元浦のクマノミ村」「ナマコブック」「志戸子のコブシメ繁殖戦略」「ウミウサギイコンテスト」「チョウチョウオマップ」など色々な視点で海を楽しんだ。また、「国際サンゴ礁年」や「海辺の環境教育フォーラム」「リーフチェック」などに参加したりした。

屋久島でショップを始めた頃はまだダイビングは魚を取る密漁ダイバーという認識しかなかった。ある日、知り合いになった漁協の林さんから「漁協内で密漁者の写真が回ってきたので見てみると松本君やった」と言われ、それは小瀬田の港でポイント探しをしていた時に撮られた写真だった。以降、林さんが「潜るときは私に連絡をしてから潜りなさい」と気にかけてくれた。それでも一湊の港ではとても潜れる環境ではなかった。このアウェー感を一気に巻き返したのが「フォトデュポアソン」(全国魚種調査コンテスト)だ。1989年第2回大会1990年第3回大会の2年連続優勝(1991年第4回大会は開催されるも事務局が解散し、結果が出ないまま大会は終了)を果たし、南日本新聞に「日本一豊か 屋久島の海」と6段抜きで載ったり、調査の様子をMBC放送が「どんと鹿児島」で密着取材をしたり、屋久島は山だけじゃなく海も素晴らしいということを証明した。これを機に学校や婦人会の集まりなどで海のライド映写会を頼まれたり、屋久杉自然館で「屋久島の海」



展を開催していただいたり、NHK-BSの屋久島特集(1日屋久島から生中継をした)で乗生の海中から生中継をしたり(このビデオがしばらくの間フェリー屋久島2の船内で流されていた)、いろいろな形で屋久島の海が取り上げられるようになった。島におけるダイビングへの見方が随分変わってきた。90年に旧上屋久町が開催した「屋久島10景」写真コンテストで私の「テーブルサンゴ」が金賞を受賞した。また、屋久島産業文化研究所の日吉さんが屋久島の季刊誌「生命の島」に表紙、巻頭写真として紹介してくれた他、「海の生き物紹介」ということで、27号(1994年)から55号(2001年)まで26回のコラムを連載させていただいた。書いているうちに生き物紹介にとどまらず、そのころ悶々と考えてた哲学的なことまで、毎回頭を抱えながら、日吉さんや卓ちゃんや西やんに励まされて書き綴った。これは今となっては私の宝物である。日吉さんにはいろいろなことを教わり、本当に感謝をしている。

もう一つは、「屋久島海洋生物研究会」(1989年7月)を発足し、1年間の海洋調査を行い、当時、九州大学の野島先生をお招きして「屋久島沿岸海洋生物学術調査報告書」(1992年3月)をまとめたことだ。この成果をもとに市川が屋久島の海中公園指定を推し進め、2002年2月栗生地区が海域公園(海中公園)に指定された。また、旧屋久町から予算をいただき、セルフガイドパンフレットを作成し、「栗生塚崎タイドプール水族館」が実現した。

その後も海関係の調査依頼が来るようになった。鹿児島県技術協会のサンゴの調査、環境省のオヒビトデの調査、和歌山大学のソフトコーラルの調査、皇居生物学御研究所のハゼ調査、屋久島海中公園基礎調査、口永良部海中公園基礎調査など様々な海洋調査に協力・参加させてもらった。その中でも環境省モニタリング1000のサンゴ礁調査は、2003年の手法検討会から呼んでいただき、2004年から大隅諸島を担当して現在まで17年継続している。この調査のおかげで、野島先生を始め、全国の第一線で活躍されているサンゴの研究者の仲間に入れていただいている。毎年のモニタリング1000検討会やサンゴ分類研究会の発表はサンゴ研究の最先端に触れられるとても有意義な場所だ。モニタリング1000は100年継続するという壮大なプロジェクトで、私はあと何年関われるか分からないがライフワークとして体力の続く限り続けたいと思っている。

ダイビングを始めて45年、屋久島で潜り始めて33年、ダイビングを通じて海と関わってきた。あと何年現役で頑張れるかは分からないが、屋久島スキューバダイビング事業者組合の名誉会員にさせていただいたので、もう少しダイビング業界と調査活動に関わってきたいと思う。



## 縄文人の心を探る

市川 聡

### 1.はじめに

豊かな縄文文化に触れば触れるほど、縄文人の心の内を知りたくなります。しかし文字がなかった時代なので、直接その心を知ることはできません。

横峯遺跡に竪穴住居を建てて、縄文ライフを楽しんでいるうち、竪穴住居には窓がないので、灯りが必要だったのではないかと考えました。そこで縄文燈明を作るべく、ヤクシカの脂身を使ってみたら、これがなかなかの傑作で、麻ひもを芯としてワックスろうそくに似たところ、長く明るくともるだけでなく、全く腐らず臭いもせず、完全に役割を果たすものができました。ろうそくができればそれを飾る台が欲しくなります。

縄文時代の中期には、長野県を中心に中部地方で吊手土器と呼ばれる土器がつけられました。中に煤がついていることから、灯りをとすための道具であろうと考えられています。この釣手土器との出会いから、縄文人の心の探求が始まりました。



12

### 2.記紀神話は縄文起源!?

吊手土器は縄文土器の中でも装飾性が高いことで知られており、特に逸品とされる長野県の御殿場遺跡（写真下）や曾利遺跡のものは、顔面付吊手土器といわれ、人面装飾が施されていることに特徴があります。顔には耳飾りの穴が開いていることから、女性の顔だということがわかりますが、この中に灯をとすと、女性のおなかの中に火が燃えている状態となります。日本では火の誕生神話が記紀に記されていますが、イザナミが火の神ヒノカグツチを産んで、その火で大やけどを負って死んでしまうという物語で語られています。古代史研究家の川谷真氏は、類似の土器の文様などから、詳細に検討して、人面側（写真左）の中央の穴は、産道を示し、まさに火の神を出産している様を表していると述べておられます（川谷1988）。また反対面（写真右）は、明らかに単純に女性の後ろ姿ではなく、中央にへびが這い登り、巨神兵の顔のような大きな目があることから、死んだイザナミが黄泉の国で腐乱死体となり、髑髏の頭に八雷神（ヘビ神）が這いまわる姿を象徴していると考えられています（これだけの説明ではよくわからないと思いますので、ネットで川谷氏の釣手土器の話を読んでみて下さい。とても面白く説得力があります。）。この仮説を信じると、記紀に記された神話が、実は縄文時代から数千

年間語られてきた、縄文人の物語であることとなります。

### 3.古事記を読む

そう思ってもう一度古事記を読み直してみました（三浦訳2006）。古事記は8世紀の初頭に書かれた歴史書であり、縄文時代よりはるかに新しいものです。特に後半は天皇家の来歴となっており、これは縄文時代とはかかわりありません。前半の神代の神話の中に縄文人が語り継いできた物語が隠されていると思われる。

古事記の神話はどれもダイナミックで面白い話が多いのですが、やはり新しくなればなるほど、大国主の国譲りの話など、弥生以降の影響を受けているような気がします。より古い話こそが縄文時代から語り継がれた物語の可能性が高いと考えられます。そうするとまず注目しなければいけないのは、日本創生の国産みの話です。

この国の国土は、キリスト教的な全知全能の神が一人で創造したものではありません。イザナキとイザナミが天の御柱を廻って「媾う（まぐわう）」ことで、産み出されました。

最初、高天原に生まれた神は、独り神で、次々と生まれては隠れてしまい、ほとんど何も生まれません。独りでは何も生まないのです。今度は次々と男女の兄妹神が生まれます。しかし多くはそのまま隠れてしまいます。男女がいるだけでも何も生まないのです。

この兄妹たちの最後に生まれたのがイザナキとイザナミでした。イザナキがイザナミに体の出来具合を尋ねます。するとイザナミは「成り成りて、成り合わぬところがある。」と答えます。イザナキは「私には成り成りて、成り余るところがある。」と答えます。体としては出来上がったけれども、それぞれに何か所不完全なところがあると訴えたのです。そこでイザナキは、イザナミの成りあわぬところを、自分の成り余る部分で刺し塞いで、国土を産み出そうと提案します。つまりは男一人でも女一人でも不完全であって、「媾う」ことで初めて完全となり、新たなものを産み出すことができるということが、イザナキとイザナミによって発見され、そこではじめて日本の国土が誕生したという筋書きとなっています。つまり全ての豊かな恵みは男女の「媾い」でこそ産まれるという思想が、日本創生の物語に込められているのではないのでしょうか。

### 4.土器に見る縄文人の想い

縄文土器というと岡本太郎が絶賛したような装飾的な土器を思い起こす方が多いのではないのでしょうか？実際には屋久島で見られる一湊式土器や松山式土器のように、具象的な物語を思わせる派手な装飾がない方が普通です。こゝでの装飾土器は縄文時代の中期をピークに、それも関東甲信越あたりに栄えた限定的なものでした。しかしそれらの土器の強烈な熱量が、縄文時代にはまる人々を魅了し続けているのも事実です。

そうした土器の中には、明らかに性交をモチーフとした装飾の物があります。下は長野県曾利遺跡出土の深鉢で、股の間の穴と矢印で素朴に表現されています。もともと土器の多数を占める深鉢型のは、食べ物の煮炊きに使われるいわば土鍋でした。そこに施される模様には、豊かな食べ物の安定的な恵みへの祈りが込められていても不思議ではないでしょう。そうすると「媾う」ことで初めて無から有が生まれるという奇跡が豊かさを産み出す根源であると思っていれば、このようなデザインは非常にわかりやすい祈りといえるでしょう。このような直接的なデザインだけではなく、装飾土器には、へびと穴を思わせるものが非常にたくさんあります。

有名なのは長野県尖石遺跡から出土した勝坂式土器で、蛇体把手付深鉢型土器といわれています（次ページ写真下左）。把手が波打つへびと穴からできていることがわかります。



13



この把手部分の形状をよく見ると、国宝となっているあの火焰式土器（写真下右）の把手も、左右は反転していますが、炎のように波打つ線と穴から構成されており、基本的にこの形状と同じだということがわかります。複雑かつ芸術的な火焰式土器も、よく見ると少し前の勝坂式土器のへびと穴を抽象化してデフォルメした物であることがわかります。そうしてみると、装飾的な縄文土器のそこかしこにへびと穴のモチーフが隠れていることがわかります。これはまさに「成り成りて成り余るへび」と「成り成りて成り合ぬ穴」を表しているのではないのでしょうか？

## 5.人は「媾う」ことで子供が生まれること知っていたか？

ところで「媾う」ことで子供ができるまでの間に、十月十日もの間隔があります。無人島に取り残された少年少女の成長を描く映画・青いサンゴ礁のブルック・シールズは、子供ができた時に、その原因を理解できないでいました。マリノフスキーの論理というのがあり、「未開人の性生活」という著書の中で、メラネシアの調査から、未開人は子供ができる原理を知らなかったと述べています。マリノフスキーの業績については、現在は否定的な人類学者が多いのですが、この論理から縄文人も生殖の原理をしらなかったと考える考古学者もいます（能登 2011）。しかし縄文時代の両性具有的な遺物から、知っていたと考える人類学者もいるようです。



そもそも交尾にまつわる行動を繁殖活動といっていますが、はたして野生動物は、その原因と結果を知っているものなのでしょうか？長年屋久島でヤクザルの研究を行ってこられた龍谷大学の鈴木滋さんに訊いてみました。サルの認識について、そこまで複雑な話しを確定的に知るのとは不可能ですがと断りつつも、「サルに関しては交尾と妊娠の関連を認識していることをポジティブに示す証拠はない」とおっしゃっています。

一方、ゴリラの研究者である京都大学の山極寿一さんは、ゴリラはハレームを作り、メスが集団間の移動をしますが、新しく来たメスと交尾をしても、出産が 5 か月以内だとその子供を殺して、新たな発情を促すので、交尾と出産をちゃんと結び付けているとおっしゃっています。ちなみにゴリラの妊娠期間はおよそ 8 か月半だそうです。カレンダーのない世界で、数か月単位の時間の認識ができるというのは、驚異的な話です。ただチンパンジーは乱婚社会で、オランウータンは単独社会なので、おそらく認知はしていないだろうとおっしゃっています。つまり知能の問題ではなく、社会システムの問題なので、人類もゴリラのような社会を営んでいれば、早い段階で認知していたのではないかとのお話でした。

それでは縄文人の婚姻制度はどのようなものだったのでしょうか？縄文時代前期の富山県小竹貝塚の人骨に見る炭素・窒素安定同位体比などの研究から、当時は男性が集団間を移動して婿入りする母系社会であったと推定されています（



山田 2019)。一夫多妻かまではわかりませんが、母系社会で子殺しはあり得ませんので、社会構造から縄文人が原因と結果を理解していたのかは定かではありません。

しかし私には古事記の創生の物語は、「媾う」ことで子供ができることを知った驚きが、世界の誕生に結び付けられて、語られているようにしか思えません。縄文土器に描かれた世界観を見るに、ある時縄文人がそのことに気が付いてしまったのではないかと思うのです。

## 6.縄文人はいつ気が付いたか

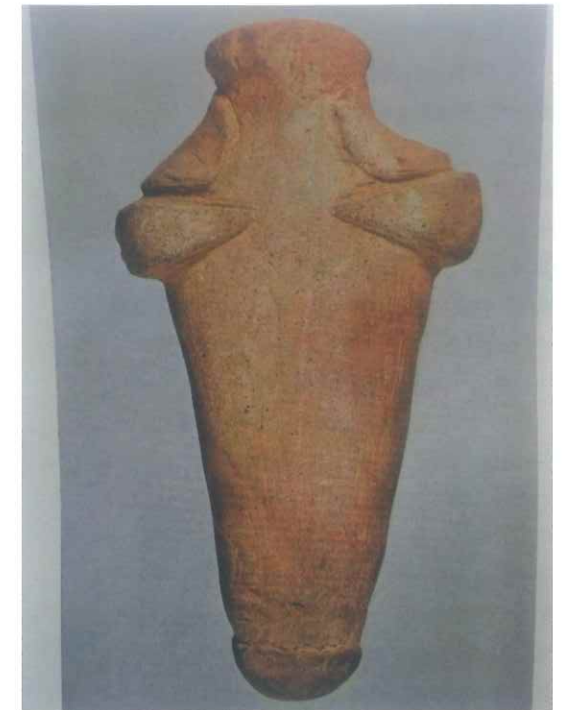
縄文時代に入ると草創期から土偶が作られています。土偶は基本的には女性の、それも妊婦をかたどったものが多いことが知られています。おそらく出産し子供を産み出す女性の力が豊かさの根源として扱われていたのではないのでしょうか？

ところが縄文時代の前期になると、土偶と共に石棒というものがつくられるようになります。これは男根そのものを表しています。しかし男根そのものだけではなく両性具有を表すものもあります。

右上は秋田県から出土した縄文時代前期の岩偶といわれていますが、とても土偶のような人型には見えません。むしろまさに成り合ぬところを成り余るもので刺し塞いだ様をリアルに表した石棒のように見えます。

それまでは処女懐胎する女性にこそ豊かさの根源があるとして、土偶をせっせと作って来たのですが、いやいや男性もあっての豊かさだということに気が付いて、石棒を作るようになったのではないのでしょうか。

縄文時代前期とは、鬼界カルデラの噴火以降およそ 5500 年前までを言います。時まさに縄文海進の真っただ中です。この時代の関東の縄文人のミトコンドリア DNA がインドネシア人と一致したり、また計量比較言語学によると日本語は 6000 年くらい前にインドネシア語系の言葉の影響を受けている（安本 1985）、など様々な間接的証拠から、縄文時代前期にインドネシア方面から大量の人が移動してきた可能性が高いと思われる。実はイザナキとイザナミの兄妹が結婚して国土や神々を産んだという神話に類似した話が、東南アジアに広く分布しています（吉田 1992）。それだけではなく、火の誕生の物語も穀物誕生の物語も広く東南アジアと共通しています。そうするとこうした物語は、南方から丸木舟に載ってきた人たちとの交流の中で語り伝えられたものかもしれません。また混血と



いう事態にあたって、「媾う」ことに気が付いた可能性も考えられます。

いずれにせよ縄文人にとっては、「媾う」ことで子供ができるということを知ったことは、大発見であり、そこに創生の神話を当てはめて、数千年の間語り継いできたとするれば、ある意味理にかなった科学的な態度と言えるのではないのでしょうか。そうした自然の法則にのっとった世界観こそ、現代日本人に通じるものではないかと考える次第です。

## 参考文献

- 川谷真 吊手土器の象徴性（上下）、東アジアの古代文化 96,97 古代学研究所編 1988
- 三浦佑之 口語訳古事記[神代篇] 文春文庫 2006
- 能登健 列島の考古学 縄文時代 河出書房新社 2011
- 山田康弘 縄文時代の歴史 講談社現代新書 2019
- 安本美典 日本語の起源を探る PHP 研究所 1985
- 吉田敦彦 日本神話のなりたち 青土社 1992



## Calendar・2020-21

2020

- 7/20 小原 文教大学観光学科リモート授業 講師  
7/26～ 岡山理科大学教員免許更新講習コロナ中止  
8/23-25 JR 東日本ゆとりの大人旅受入  
8/30-9/2 岡山理科大学エコツーリズム技法受入  
9/6 台風 10 号通過。厳戒態勢も無事。  
9/11 松本 京都大学 SDGs ネット講義  
9/12 環境省国立公園誘客推進事業(YOM)の打合会議  
9/13 松本 竹富町観光案内人条例等審査委員会出席  
9/15-17 松本 奄美大島テキストワークショップ参加  
10/11-13 市立千葉高校研修旅行受入  
10/13 市川 世界自然遺産旅行商品商談会(東京)  
10/19～ 市川 安房城発掘調査アルバイト  
10/22 松本 三次市アドバイザー派遣  
10/24～11/1 小原 屋久島ワーケーショントライアルの企画  
10/31-11/3 風の旅行社屋久島ツアー再開受入  
11/2 松本 青森エコツーリズム講師派遣  
11/4 市川 世界自然遺産旅行商品商談会(大阪)  
11/7-10 松本 対馬環境アドバイザー派遣  
11/13-16 松本 黒潮町アドバイザー派遣  
11/17 松本 環境省エコツーリズム人材育成 ZOOM 講師  
11/19-20 松本・市川 世界遺産旅行商品商談会(屋久島)  
11/25 松本 環境省エコツーリズム人材育成 ZOOM 講師  
11/28-30 JR 東日本ゆとりの大人旅受入  
11/29-12/6 市川 カメラマンのガイドで野生動物撮影ガイド  
11/30 松本 環境省エコツーリズム人材育成 ZOOM 講師  
12/4-7 松本 山口県ランプの宿アドバイザー1 回目  
12/18-20 松本 山口県ランプの宿アドバイザー2 回目  
12/22-24 ノートルダム清心学園研修旅行受入  
12/23-25 松本 与論講習会講師

2021

- 1/8 4 都県に 2 回目の緊急事態宣言  
1/11-13 松本 徳之島講習会講師  
1/13-15 松本 沖永良部島講習会講師  
1/23 小原・福留 ウェビナー『屋久島オンライン～島そのものがミュージアム』企画、スピーカー第 1 回屋久島の森と水  
1/30 同上ウェビナー 第 2 回屋久島と生きものたち  
2/5 松本 奄美講演  
2/6 同上ウェビナー 第 3 回屋久島の歴史  
2/13 同上ウェビナー 第 4 回屋久島の遊び方・楽しみ方  
2/15-16 松本 周防大島講演  
2/18-19 松本 野島アドバイザー派遣  
3/4-8 松本 奄美エコツーリズム講習会講師  
3/11 市川 安房城発掘調査終了、謎の石像発見！  
3/14 同上ウェビナー 第 5 回もっと知りたい屋久島編  
3/13-15 松本 竹富町観光案内人条例等審査委員会出席  
3/23 龍谷大学学生実習受入  
大阪大学超域イノベーション博士課程実習受入  
2/16-21 東海大学エコツーリズム研修受入

## Contents

巻頭言 ガイドを志す君たちへ	市川 聡 1
屋久島の鳥たち～1年の記録をとおして～	福留千穂 2
屋久島の歴史と観光の周辺事情	松本 淳子 5
アサギマダラ	小原比呂志 8
私的ダイビング史	松本 毅 10
縄文人の心を探る	市川 聡 12

- 2/22 徳洲会ツアーはじまる  
2/23-24 沢部 大隅半島沢登り研修  
3/21 2 回目の緊急事態宣言が全国で解除  
3/24-26 JR 東日本ゆとりの大人旅はじまる  
4/5-7 松本 黒潮町スキルアップ講習会講師  
4/25 4 都府県に 3 回目緊急事態宣言  
5/28 市川 屋久島町文化財保護審議会出席  
6/4～ 市川 楠川城発掘調査アルバイト

## 執筆・取材記事

屋久島 春牧里めぐり里語り読本／春牧里めぐりの会編著 (南方新社)

YNAC ミュージアムが所在する春牧集落の歴史、自然、文化、産業などを、古来の話の聞き語りなどを含めて取りまとめた、屋久島の里めぐりの入門テキスト。この本を片手に、YNAC の周辺を散策していただければ幸いです。市川が編集委員長として、全編責任編集しました。1100 円(税込)で発売中です。

屋久島オープンフィールドミュージアムガイドブック 安房・春牧／屋久島野外調査研究会編

小原・福留が中心となり、島内のガイドなど有志が協力して、環境省の助成を受けて、安房・春牧からヤクスギランドに至る一帯を、県道ランド線に沿って『オープンフィールドミュージアム(野村博物館)』として設定し、地質・地形から生物、歴史、文化と、多岐にわたる内容を解説した本です。現在非売品

## 編集後記

☆この 1 年半はコロナ過ですっかりガイドの仕事がなくなり、気づいたら 6 kg も体重が増えていた。ポッコリ出た腹を何とかしなければと腹筋を始めた。やっぱりガイドでフィールドで出たいなあ！(た) ☆コロナ禍で昨年は見送った『屋久座』公演、今年こそは催行したいな。(じ) ☆お休みを頂いている間に実家に帰ってとりさんばしました。屋久島の冬鳥と思っていた鳥たちが普通に居てびっくりでした。(ち) ☆今年は GW が明けたとたん梅雨入りしてしまいました。堅穴住居の茅葺き作業ができずに困っています。でもおかげで、懸案だった茅は長く長く伸びてくれました。災い転じて福となす。コロナもそうならば良いですね。(さ)

YNAC 通信(ワイナックつうしん) NO.38

発行日:2021 年 7 月 1 日

発行:(有)屋久島野外活動総合センター

住所:〒891-4311 鹿児島県熊毛郡屋久島町安房 2353-302

TEL 0997-46-3215 FAX 0997-46-3214

E-mail: forest@ynac.com URL: <http://www.ynac.com/>

Facebook <http://www.facebook.com/Ynacyakushima>